

群 教 七	I01 - 04
	平28.261集
	特一知的障害

言語表出が少ない自閉症を併せ持つ 知的障害児の意思の表出を促す指導

— 児童が選択し、相手に伝える機会を大切にした学習を通して —

特別研修員 長谷川 真衣子

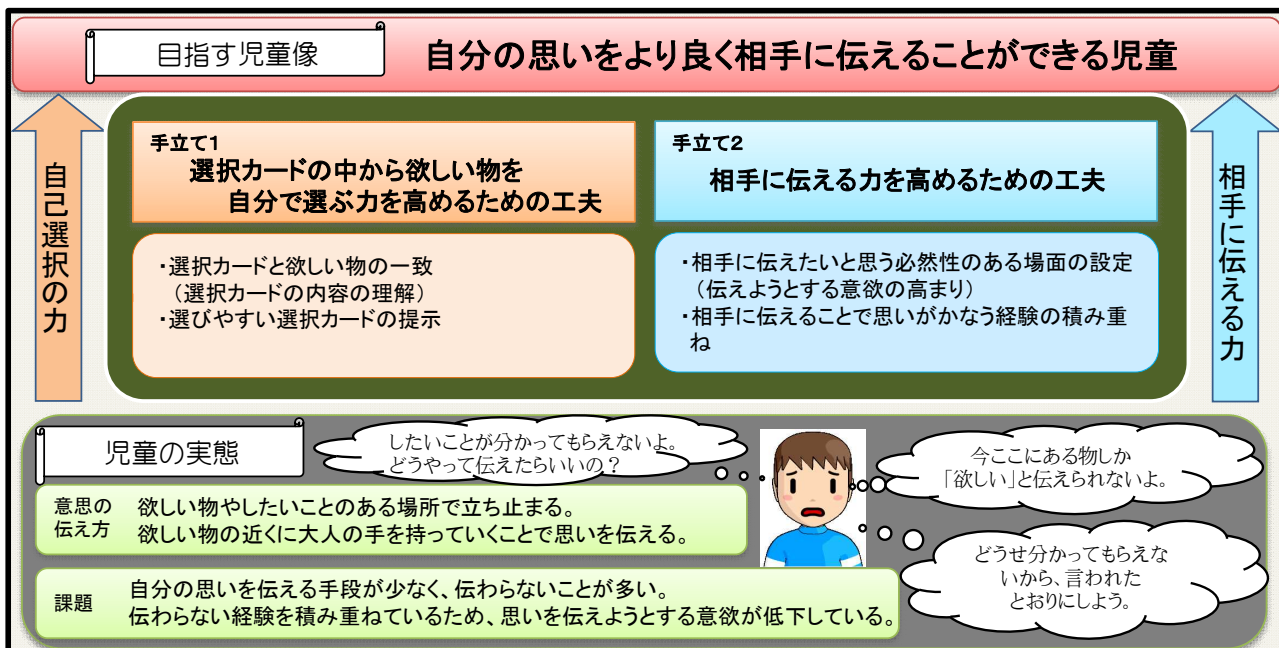
I 研究テーマ設定の理由

知的障害特別支援学校に在籍する自閉症を併せ持つ児童生徒は、話し言葉の発達の遅れや、ジェスチャーや身振りを用いることの困難さを抱えていることが多い。そのため、周囲の注目を集めるための行動や自分の思いのままに行動することで自分の思いや考えを表現したり、相手への一方的な関わり方をしまったりすることがある。また、思いが伝わらない経験が積み重なり、表出意欲自体が下がってしまうことがある。一方で、こうした児童生徒を前に周囲の支援者は、その子の思いをくみ取れているのだろうかと不安に陥ることがある。

人は誰でも自分の行動を自分で選びたい・決めたいと願い、また、自分の思いや考えを相手に伝えたいと考える。表出言語が少なく、コミュニケーションの幅が狭い段階にある自閉症を併せ持つ知的障害児にとっても同様である。自分の思いが周囲に伝わり受け入れてもらえる方法を身に付け、自分の意思を表出できるようになることは、より主体的に生きていくために重要な力となる。そこで、本研究では、「自分の欲しい物を自分で選ぶ力」（自己選択の力）と「伝える相手を意識して、より確実に伝える力」（相手に伝える力）を高めることを視点に手立てを講じ、思いをより適切に伝え、実現できるようにしたいと考え本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

本実践は、知的障害と自閉症を併せ持つ小学部5年の児童（以下本児）を対象とした。本児は表出言語は少ないが、身近な物であれば、欲しい物の近くに大人の手を持っていくことで取ってほしいことを伝えることができる。また、日常生活では、指示を待つ姿が多く見られるが、使い慣れた物などであれば、「はさみはどれ」と聞かれた際、写真カードの中から指さして選んで答えることができるようになってきている。そこで、本児が、自分の意思を表出する一つの手段として、写真付きの選択カード（以下、選択カード）から自分のしたいことや欲しい物を選択し、相手に思いを伝えられるようになってほしいと考えた。選択肢を実物とせず、選択カードとしたのは、本児が写真と実物を結びつけて理解できるようになってきていることに加え、選択カードから選べるようになることで、今、目の前にはない物も写真を準備しておくことで選択肢とすることが可能となり、より本児の思いや考えに合う選択肢が用意できると考えたからである。

実践にあたっては、本児が、選択カードを使って欲しい物を選び、相手に伝えられるようになるために以下の二つの手立てを講ずることとした。

手立て1 選択カードの中から欲しい物を自分で選ぶ力を高めるための工夫

・選択カードの内容の理解

新たな選択カードを取り入れるときには、本児に選択カードを示しながら、その内容を実際に体験させ、選択カードの内容が理解できるようにする。

・選びやすい選択カードの提示

選択カードはボードに貼って一覧化し、どのの中から選べば良いのかを分かりやすくする。

手立て2 相手に伝える力を高めるための工夫

・相手に伝えたいと思う必然性のある場面の設定

相手に伝えたいくなる必然性や文脈のある場面を設定し、伝えようとする意欲を高める。

・相手に伝えることで思いがかなう経験の積み重ね

相手を意識して伝えることができるよう、選択カードを相手に手渡す手順を取り入れたり、相手に思いや考えが伝わると対応（実現）してもらえ経験の積み重ねたりすることができるようにする。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 欲しい物を選択カードから選んで伝えれば、選択カードが示すもの（実物）がもらえるという経験の積み重ねにより、本児は、選択カードを使えば自分の思いが伝えられることを理解し、思いを伝える手段として身に付けることができた。このことは、授業実践以外の場面でも、例えば、休み時間に教師が「何をして遊びますか」と問いかけ、6枚の選択カードを示すと、自分が行いたい遊びの選択カードを1枚指さし、自分から移動して遊ぶようになった姿にも見られるようになった。
- お店屋さんごっこでは、店員役に選択カードを手渡したり、選択カードを見せて何度も強く指さしたりするなど、相手を意識して伝えようとする姿が多く見られるようになった。大好きな菓子が買える店といった、相手に伝えたいと思う必然性のある場面が設定できたことで、伝えたいという気持ちが高まり、自分から相手に伝えようとする主体的な行動を引き出すことができたと考える。

2 課題

- 本実践では、選択カードの使い方を理解し、欲しい物を選んで注文することができたが、レストランで食べたい物を注文するといった、試食や事前に繰り返し経験を積み重ねることができない場面では、選択カード一覧（メニュー表）を使って注文することは難しかった。
- 本実践で、本児が相手に伝えるために自分から行ったのは、選択カードの指さしを中心であった。指さしは、「どれ（ですか）」と聞かれたときには有効な答え方であるが、自分から意思を伝えるためには、選択カードを相手に手渡すなどの、より主体的な伝え方を確実にしていく必要がある。

実践例

1 題材名 「お店屋さんごっこをしよう」

2 本題材について

本題材は、自立活動の内容「6 コミュニケーション（1）コミュニケーションの基礎的能力に関すること」を受けたものである。お店屋さんごっこを通して、コミュニケーションの力を高めることをねらいとしている。具体的には相手に伝えたいという意欲を高めるために、相手に伝えたいと思う必然性のある場面を設定したいと考え、本児が好きな菓子を扱うお店屋さんで店員に注文するという活動を行った。その際、相手に欲しい物を伝える（注文する）ことを重視するため、金銭のやりとりは行わず、選択カードを図1のようなチケットとして位置付け、これを店員役に手渡して注文し、商品と交換することとした。また、本児は、前学期までの学習において、3枚程度の選択カードから欲しい物を選ぶことができつつあった。そこで、チケットの枚数が増えても、選択がしやすくなるよう、複数のチケットを並べた選択ボードをメニュー代わりとし、自分の食べたい物のチケットを選ぶこととした。選択ボードからチケットを選び、店員役の教師や友達に手渡すことで注文を行い、欲しい菓子や飲物を手に入れるといった経験を積み重ね、相手に自分の欲しい物を伝える方法を身に付けるとともに、そのよさに気付いてほしいと考えた。

以上のような考えから、本題材では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	選択ボードの中から欲しい物のチケットを選んで店員に手渡し、注文を伝えることができる。	
過程	時間	主な学習活動
課題	第1時	・お店屋さんで自分の食べたい物を二つの選択肢から選んで注文する。
課題 追求	第2時 ～第3時 (本時)	・お店屋さんで自分の食べたい物を三～四つの選択肢から選んで注文する。
	第4時 ～第5時	・お店屋さんで自分の食べたい物を五つの選択肢から選んで注文する。



図1 チケット

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全5時間計画の第3時に当たる。前時までに、3種類のチケットを使用したが、本時では新たに商品を1種類加えるため、新しく加えた商品と、それと交換できるチケットを本児が一致させておく必要があった。また、チケットを指さして選ぶことは定着していたが、店員にチケットを手渡すことが十分でない状況があったため、チケットを手渡す店員を意識して渡せようになるための支援が必要であった。

そこで、次の二つの手立てを具体化した。

手立て1 チケットの中から欲しい物を自分で選ぶ力を高めるための工夫

- ・選んだチケットで何が手に入るのか、チケットの内容が理解できるよう、新たに商品を加える際には、本児にチケットを示しながら試食を行えるようにして、チケットと実物の一致を図る。
- ・チケットの枚数が増えても、自分の欲しい物が選択しやすくなるよう、複数のチケットを並べた選択ボード（メニュー）を用意する。

手立て2 相手に伝える力を高めるための工夫

- ・相手に伝えたいという気持ちを引き出すために、お店さんは、本児が好きな菓子やジュースを扱う店にするとともに、注文すれば欲しい物を手に入れることができるという学習場面を設定する。
- ・自分の欲しい物を伝える手段として、欲しい物のチケットを店員に手渡し手続を取り入れる。
- ・店員を意識してチケットを手渡すことができるよう、チケットの受け渡し場面では店員と本児の間に適切な距離を置く。
- ・本児がチケットを渡せた時には、「〇〇ですね」と共感的な対応を示し、店員に渡せたこと、伝わったことを本児にフィードバックし、店員に伝わったことを本児が感じられるようにする。

4 授業の実際

前時までに、3種類のチケットから選んで注文する活動を行ってきた。本時では、1種類増やして4種類のチケットから選ぶようにした。前時までに、本児はお店屋さんごっこの設定に慣れ、どの場所で注文し、どこで食べればよいのかといった、活動の流れのおおよそがつかめている様子であった。

本時は、「4種類のチケットの中から欲しい物のチケットを1枚選んで店員に手渡し、注文を伝えることができる」ことを授業のねらいとした。

(1) 店のメニューを確認し、新しいメニューを知る

お店屋さんのメニューの確認は、実物と写真を見せて行った。前時までのメニューは炭酸飲料、リンゴジュース、スナック菓子であった。前時までのチケットを小型のホワイトボードに貼り、図2のようなメニュー代わりとなる選択用ボードを用意し、本児が選びやすいようにした。

本時で初めて加わったメニューであるチョコレートは、チョコレートの写真が入ったチケットを示しながら試食を行い、その後、チケットを選択用ボードに追加した。本児は、教師が提示したチケットとチョコレートを見比べ、試食を行っていた。



図2 選択用ボード

(2) チケットを店員に手渡し、商品を受け取る

計画では、本児が注文する前にT2が隣で注文の手本を示す予定であったが、本児は友達が注文の様子や、T2の「注文に行ってください」といった促しだけで、一人で注文を行い始め、店員役のT1に対して4回の注文を行うことができた。その際、「この中から好きな物を注文できるよ」とT2が伝え、選択用ボードを渡すと、図3のようにチケットの一枚を指さした後、選択ボードを持って、店のカウンター前まで移動することができた。1回目の注文場面では、店員役のT1が「ください」のサインを出しながら「どれにしますか」と本児に聞くことで、すぐにチケットを手渡すこともできた(図4)。



図3 指さして伝える様子



図4 注文の場面

チケットを手渡す際、カウンターの反対側に立つ店員の顔を見ながら、しっかりと腕を伸ばして渡せていたことから、伝える相手を意識して渡せている様子もうかがえた。また、注文の品をT1が準備している間、T1の後ろ姿をよく見て待つことができ、チケットを渡すと相手に対応してくれるといった流れや、チケットを渡した相手が自分の思いをかなえてくれることを理解している様子を感じ取れた。

(3) 店員役の友達に注文する

店員役をT1から友達に変え、5回の注文を行うことができた。店員役が友達に変わると、最初は、それまで店員役をしていたT1に向かい何度もチケットをトントンと指さして伝えようとする姿が見られた。T2が店員役の友達にチケットを渡す手本を隣で示し、店員役の友達とのチケットを使ったやりとりを繰り返したことで、5回目の注文では、T2の言葉掛けをきっかけに、チケットを選択ボードから取り外すと、店員役の友達の前まで進み手渡すことができた。店員役の友達が、注文した物を準備している間も、友達の後ろ姿を何度も見て待つ姿があり、商品を用意してくれるのが友達になったことを理解している様子が見られた。

表1 本児の注文の様子

回	店員役 (手渡す相手)	注文したもの	「何にしますか」と聞かれた時の本児の反応	チケットを手渡すための支援と本児の反応	相手を意識していると見取った本児の姿
1	教師 (T1)	炭酸飲料	ボードを見て指さし	教師(T1)の「ください」のサインを見て、チケットを手渡せた。	店員役を見て渡す。準備の様子をよく見ている。
2	教師	リンゴ	教師(T1)を	教師(T1)の「ください」のサインを見て、	店員役を見て渡す。

3	(T1) 教師 (T1)	ジュース スナック菓子	見て指さし 教師(T1)を 見て指さし	チケットを手渡せた。 教師(T1)の「ください」のサインを見て、 ボードごと渡した。チケットを持ち上げて持つ よう促すと、チケットを手渡せた。	準備の様子をよく見ている。 店員役を見て渡す。 準備の様子をよく見ている。
4	教師 (T1)	スナック菓子	教師(T1)に 近づきながら指 さし	教師(T1)の「ください」のサインを見て、 ボードごと渡した。ボードを本人に戻すと、チ ケットを手渡せた。	店員役を見て渡す。 準備の様子をよく見ている。
5	友達A	リンゴ ジュース	教師(T1)を 見て指さし	「お店の人に渡すよ」と教師(T2)が手で渡 す相手を指し示すと、友達Aに渡せた。	店員役を見て渡す。 準備の様子をよく見ている。
6	友達A	リンゴ ジュース	教師(T1)に ボードを渡す	教師(T2)が、店員役の友達Aに渡す手本を 隣で示すと、友達Aにチケットを渡そうとする が、友達Aがタイミングよく受け取れなかった ため、本児はチケットをボードに戻して、指さ しをした。教師がチケットを持ち上げて持つよ う促すと、チケットを持ち上げた。持ち上げた チケットを友達Aが取った。	店員役を見て渡す。 準備の様子をよく見ている。
7	友達A	スナック菓子	周りを見ながら 指さし	教師が、店員役の友達Aに渡す手本を隣で示す と、友達Aにチケットを手渡せた。	店員役を見て渡す。 準備の様子をよく見ている。
8	友達B	スナック菓子	教師(T2)を 見て指さし	教師(T2)がチケットを少し持ち上げて見せ るとチケットを持ち、その後、教師(T2)が 友達Bを指し示すと友達Bに渡せた。	店員役を見て渡す。
9	友達B	チョコレート (選択肢にスナ ック菓子なし)	教師(T2)を 見て指さし	教師(T2)がチケットを少し持ち上げて見せ るとチケットを持ち、その後、教師(T2)が 友達Bを指し示すと友達Bに渡せた。	店員役を見て渡す。 準備の様子をチラッと見た。

5 考察

(1) 「好きなものを選択すること」について

表1にあるように、本児は、初回の注文において炭酸飲料を注文したが、2回目以降、炭酸飲料を注文することはなく、リンゴジュースを連続して注文している。これは、本児が、炭酸飲料とリンゴジュースを飲み比べ、好みに合ったリンゴジュースを意図的に選び注文できた結果と思われる。また、選択した菓子については、日頃から本人が好物としているスナック菓자에注文の回数が偏っており、スナック菓子が品切れになり、教師が「もうありません」と伝えることで、注文できないことを理解し、スナック菓子からチョコレートに注文を変えていることから、チケットの内容を理解し自分の食べたい物を選んで注文できていたことが推測できる。

(2) 「相手に伝えたいと思う必然性のある場面の設定」について

普段は受け身がちな本児であったが、興味のある食べ物を扱う店を設定したことで、「教師が注文に行ってみたら」と促すだけで、自分から席を立ち上がり注文に向かおうとする姿が9回も見られた。また、表1にあるように、注文した後、食べ物が準備されるまで、店員の作業の様子をよく見て待ち続けるなど、相手に伝えてその応答を待つことも理解できたと考えられる。

(3) 「相手に伝えようとする意欲」について

相手に伝えることについては、表1から分かるように、本児から自発的に出た動きは、ほとんど指さしだった。これは、前学期に、選択カードの中から選ぶことを学んだ際、指さしを使って相手に伝えていたため、指さしによる表出が身に付いた結果と思われる。渡して伝えるといった行為には十分には至らなかったが、指さしで伝える際、相手を見て何度も強く指さしていることから、相手に伝えたいという思いを十分に持っていたことが感じられた。

(4) 「チケットを手渡して相手に伝えること」について

チケットを渡す行動については、表1にあるように、教師が「ください」のサインをしたり、チケットを少し持ち上げてチケットを持つ支援をしたりしたことで渡すことができた。しかし、自分からチケットを1枚手にとって渡すことはまだ言葉掛けなどの支援が必要であった。チケットを選ぶこと、選んだチケットを1枚持って注文に行くといった手続を分けることで、手渡す行動を引き出すことができたのではないかとと思われる。